

論稿 II

本稿は、秀松が『宮沢賢治全集』『月報』第 9 号(筑摩書房、昭和 31 年 12 月)に寄せた文章からの抜粋です。賢治研究においても貴重な資料です。

寄宿舍での賢治

高橋 秀松

私が彼と親しくなったのは入学と同時とってよい。元来盛岡高農では一年生は必ず寄宿舍生活をさせられる仕組になっていた。賢治と私は南寮の第一号室で室長は三年生の渡辺五六先輩で室員は各科二名宛で計六名、室長と私の机は向合い賢治の机は私の右斜め、一つの電灯を中心に囲んで配されてあった。

寝につくときも位置がきまっていた私と賢治は布団を接していた。親しくなるのは当然であるが、賢治は学生時代は殆んど友達をつくろうとしなかった。彼の頭脳は断然他を抜いていたので学問上のことでは畏敬されていたが、彼の風変りな言動に理解を持し得ぬ者が多く自然同調する者が極めて少なかった。賢治から見れば、誰もが自分を知ってくれないデクノボウと思っていた事であろうと察せられるのである。

休みが二、三日続いた時は、出来る丈遠くへ出かけた。ビスケットと水筒、彼は礦物採集のためのハンマー我は植物採集ドウランを携えて、彼はコンパスと五万分の一の地図、星座図表等を必ずバックに収めるのを忘れはしなかった。途すがら語りつつ詩作しているのが彼の常態である。左手に持った手帳には歩き乍らしばしば鉛筆で書き記す。興が乗ってくれば路傍に腰を下ろして懸命に書きつける。アレあの積乱雲の突端にビードロの衣をつけた男が走っている、誰だろう等といたりする。月夜の麦の穂波を銀の海とって走り出す等。

愈々一年の終末試験を終えて賢治も私も郷里に帰っていた。二人とも落第は大丈夫、しないことに約束したものの、多少心配していたら、賢治から電報が来た。「二人とも二年に進級、二人とも特待生おめでとう」と。此のとき程うれしかったことは三年の学生生活のうちでなかった。

それからのあとは賢治とわれとは全く兄弟同様に交友をつづけた。そして賢治はその妹敏子さんが目白の女子大から一週間必ず一度の消息をよこすと私の前で開き読み合う。ここに三人の兄弟が出来上がった。敏子さんの文章と文字は賢治のそれと比べものにならぬ程優れたものであった。

そこで私はせめて学生時代の資料を纏めようと企てて静六さんに暗号ノートをどうしたかと問うたら、何ものも残していないというのである。私の推理では彼が詩や童話を超人的速度で作り得た処の資源は、あの学生時代一日も欠かさず記録した日記帳に在ると思うのである。「アソネリダテンツェーリン」「野の師父」「グスコブドリの伝記」「岩手山」その他思い当たるものが数々ある。

私にもそれらのことをもう少しハッキリする義務が在ると思うが、まだまだ手が届かないで、今は専ら新しい農村の建設に意を用いている。